11の講義内容

手塚治虫の作品―その7『きりひと讃歌』上・下―

2009.06.19更新

萩原　義雄

はじめに

『きりひと讃歌』は、醫者としての手塚治虫と漫画家である手塚治虫とのふたつの顔を作品中に垣間見る作品の構成を作り出している。

この特殊な醫療社会組織を作品中の冒頭コマの一つでこのように説明する。

医長の回診ともなると医局員からインターン生まで何十人ものお供がゾロゾロと金魚のウンコのようにくっついていく。これを皮肉って『大名行列』と呼んでいることは『白い巨塔』という小説をお読みになったかたはご存知であろう。〔上巻6頁〕

このなかで、「大名行列」と異称する医局の回診光景を山崎豊子原作の小説『白い巨塔』を例に示す。

この主人公は醫者である小山内桐人という。彼の名前がフルネームで登場するのは、谷川に流され下流の吊り橋の下で助かったとき、吊り橋から許婚者であるいずみが「あの……ちょっと……、……。この先……犬神沢村でしょうか？。あの…そこへ行きたいんですけど……その村に小山内桐人って人いません？ねえ、お医者なんです。二十七歳でがっしりした人なんです。」〔上巻104頁～105頁〕で許婚であるいずみが話しかける時に初めて明らかになるのである。そして、これを裏付けるかのように小山内自身、「すまぬ……、……きみの知っている小山内桐人の顔をした男は……もういないのだ……」〔上巻106頁〕と独言することでこの人物の名が初めて明らかとなる訣なのだ。この青年医師桐人（きりひと）が取り組む病氣が奇病のひとつである風土病であった。其名を「モンモウ」病という。

「モンモウ病」と呼ばれる病気

M大學附属病院医師小山内桐人は、「モンモウ病」の症状をこのように分析する。

「惡寒染率。無力感。排泄障碍。それにメニエール症候群か……それと……生肉をたべたことね…異物嗜好症…これも典型的だ」〈小山内〉〔上巻55頁～56頁〕。

この小山内は、四国讃岐犬神沢村に赴きここで「モンモウ病」の患者と直接接触する。やがて、自身もこの「モンモウ病」に取り憑かれてしまう。醫者である小山内は、この病気の原因を明らかにする意味からも自らの闘病日記を綴る。この日記はやはり、前回に学習した「手書き文字」の手法で表現し、上・下2コマを以て示される。次にそのコマ部分を掲載し、翻刻しておこう。

四月十三日

ひどい目まいとはきけ　　そして奇妙な
空腹感　　むやみに肉をたべたい　　血のしたた
るような生肉を
原始人は猛獣のように肉を火にもかけずにたべた
のだろう　　現在もコンゴやニューギニアに　生肉しか
たべない種族がいるときく

字をかくのが困難だ　指がよく動かぬ　一字
一字おさえるようにして　やっとかく
脈搏八五　　血圧一一〇　体温三七度八分

四月十四日
きよう　たづの父親が死んだ
その死に顔はまさに犬であった
村の連中は次の犠牲者を　私に
きめてしまっている
たづはかわいそうだ　　たづのため
にも　私はぜったい死ねない　　た
とえ犬になっても私は生き残ってやる

という具合に、九五頁挿絵を上・下二段にしてこの「手書き」文章が記述されている。上段は、十行、下段は、八行一四二字、下段八行八八字の文章で構成され、上段は発病の症状を具体的に書き留めると同時に、生肉を食べる種族に触れる。下段では次の日として、この同じ病状にあったたづの父親の病死について、自分の今後の決意が綴られる。

［語の分析］

A1【漢語名詞】四月十三日。三七度八分。一字一字。空腹感。一一〇。原始人。猛獣。現在。種族。困難。脈搏。血圧。八五。肉2。字。

A2【漢語形容動詞】奇妙な。

B1【和語名詞】血。火。指。目まい。はきけ。

B2【和語動詞】いる。動か。おさえる。かく2。かけ。きく。たべ3。したたる。

B3【和語形容詞】ない。ひどい。

B4【和語副詞】むやみに。やっと。よく。

B5【和語接続詞】そして。

B6【和語助詞】が。と2。に2。の2。は。も。や。を4。のが。だが。にも。しか。して。

B7【和語助動詞】ず。た。たい。ぬ。のだろう。ような。ように2。

C1【洋語】コンゴ。ニューギニア。

D1【混種語名詞】生肉2。

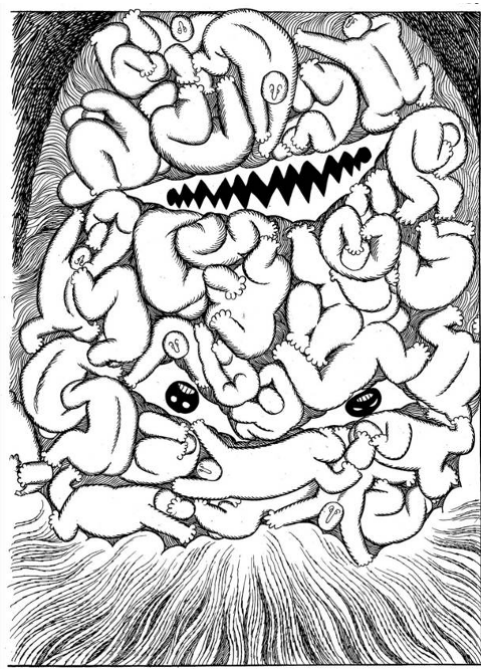
［語の意味］

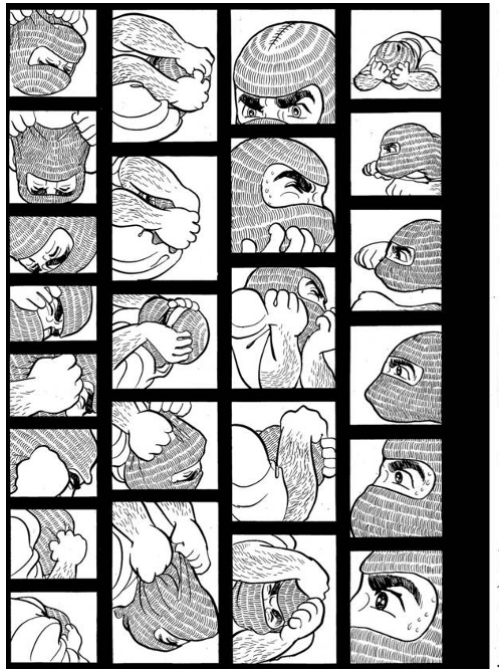
※めまい【目眩・眩暈】目がまわること。目がくらむこと。げんうん。謡曲、卒都婆小町「あら苦し―や、胸苦しやと」。「―がする」〔岩波書店『広辞苑』第六版〕

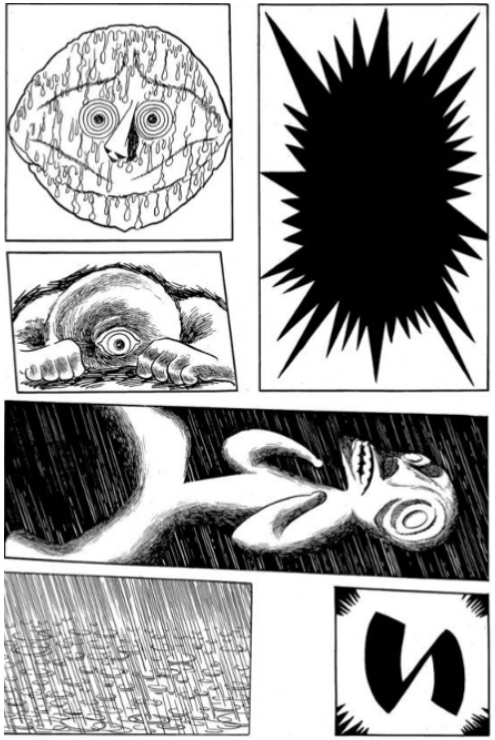
※したたる【滴】〔自五〕（「下垂る」の意。古くはシタダル）①水などがしずくとなって垂れ落ちる。〈新撰字鏡（6）〉。今昔物語集（3）「其の峒（ほら）常に潤（うる）ひ…水―・り」。「額から汗が―・る」②美しさやみずみずしさがあふれるほどである。「緑―・る候」〔岩波書店『広辞苑』第六版〕

［課題］　次の文章を右の方法に倣って、ご自分で語分析して見よう！

四月十四日きようたづの父親が死んだその死に顔はまさに犬であった村の連中は次の犠牲者を私にきめてしまっているたづはかわいそうだたづのためにも私はぜったい死ねないたとえ犬になっても私は生き残ってやる







三　深層心理の描画

手塚は、こうした人の頭のなかを駆け巡る不思議な光景を描き出す。右上圖には、裸人がくぐまり伸びあがり重なり合い犇めきあったその一部に、三角形の二枚の旗に黒顔に白抜きの目と口、肉食恐竜の口を思わせる大きな口があり、まるで「だまし繪」のような大きな顔が描かれているようにも見える。次に、左上圖には、桐人（きりひと）の懊悩する上部の連写二十六枚を写真フィルム状のようにして連続コマで示す。

そして下右圖には、放たれた衝撃！民族土偶の悲しみに満ちた奇妙な顔像、一つ目の怪人、そしてまるで敵人を呪咀する時のような苦痛に満ちた人形、これに平仮名「い」なのか、横文字「N」か、将又、記号のような文字が描かれてあり、間を少し開け、最後に唯強い雨だけが地面にたたき付けて降っている容子を描き出している。この深層心理の絵画をどう読み解くか？ここで少しく考えてみたい。

［**課題2**］右の画像を見て、作者手塚が時折作品中に見せる「深層心理の絵画」描写について、ご自身の見解をまとめてみよう。他の作品資料と比較して考察を深めてみることを期待したい。

各人のそれぞれの鑑賞寸言論を茲に自由に記載することにします。